

第2部 白川村における地域資源活用型 体験交流プログラムの現状と展望

堀 智 考*

はじめに

第1章 調査対象自治体の特徴

1-1 白川村の特徴

1-2 白川村観光の現状と課題

第2章 地域資源を活用した体験交流事業の現状と課題

2-1 白川郷まるごと体験宿

2-2 トヨタ白川郷自然学校

2-3 白川郷観光案内の会

2-4 白川郷荻町集落の自然環境を守る会

2-5 (財)世界遺産白川郷合掌造り保存財団

2-6 野外博物館合掌造り民家園

第3章 子どもの学び場としての農山村体験交流事業の可能性

3-1 学校教育における可能性と課題

3-2 地域活性化における可能性と課題

第4章 実施に向けた提言

おわりに

はじめに

本論文は、岐阜県内の優れた体験交流事業を、子どもたちの学びの機会として提供し、都市・農村間の交流人口の増加を目指す「岐阜ほんもの体験交流プログラム」の現地調査結果を踏まえて、「白川村における地域資源活用型体験交流プログラムの現状と展望」をとりまとめたものである。

また、2007年3月に岐阜経済大学まちなか共同研究室マイスター倶楽部がとりまとめた「地域資源を活用した『子どもの学び場の創出』と観光資源化に関する調査研究」では、地域資源を活かした体験型観光プログラムを構築し、地域を子どもたちの交流や学びの場とすることにより、日帰り・見学习型観光から滞在・体験型観光へ転換を図るひとつの手法と提言している。今回は、その提言をより深化させ、具現性を高めるため、地域と共生する岐阜経済大学40周年記念事業として、2度にわたり白川村を訪問し、地元観光関係者をはじめとする現地調査を実施し、体験交流事業の現状と課題を分析しながら、具体的な提言をまとめたものとなっている。

今回の調査と全く同時期に、第1部で詳しく

述べた通り総務省や文部科学省、農林水産省が連携し、全国の小学生120万人が農山漁村で長期宿泊体験をすることを旨とする「子ども農山漁村交流プロジェクト」も開始されており、学校教育における体験学習の必要性及び農山村漁村の地域活性化の両面から、今後5年間にわたり重点的な取組が推進されていく予定である。そうした意味からも、今後、新たな観光対策や地域活性化策に取り組む地域住民や観光関係者に、この研究論文が、少しでも役立つことを期待したいと考える。

第1章 調査対象自治体の特徴

1-1 白川村の特徴

白川村の自然・社会環境

白川村は、霊峰白山の麓、岐阜県北西部に位置し、急峻な山々に囲まれた農山村である。村の面積のうち95.7%を森林が占め、白山国立公園、天生県立自然公園など豊かな自然環境に恵まれる一方で、急斜面な山地間を流れる庄川の流域に集落を形成している。また、村は日本有数の豪雪地帯であり、夏は涼しく過ごしやすいつ反面、冬は一面の雪に覆われる。

また、村は岐阜県や富山県、石川県に接する県境の村であり、合掌造りや「結」の精神、どぶろく祭りを始めとする伝統行事、有形及び無形の文化財など、今では国際的にも注目される様々な独自の文化を守り育ててきた歴史を持っている。

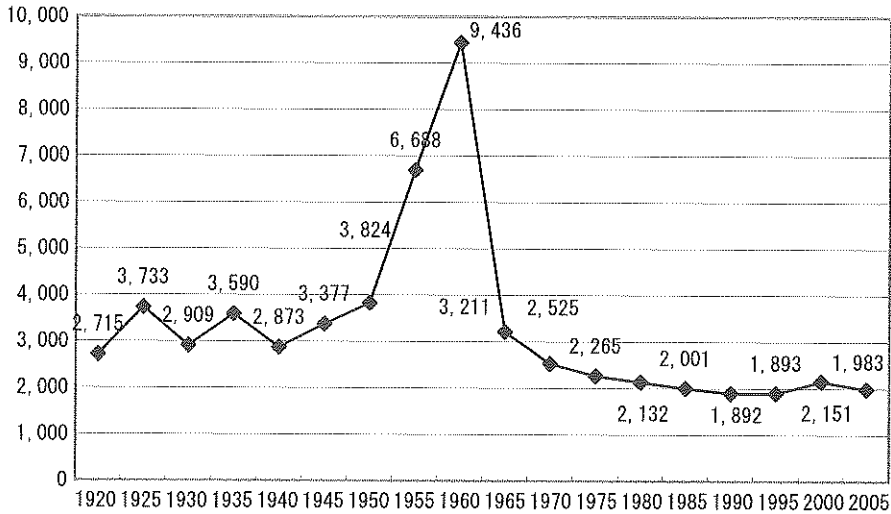
白川村の人口動向

白川村の人口は、1960年代の御母衣ダム建設工事により大幅に人口が増加したが、工事終了以降、年々減少し続けてきた。しかし、1995年の世界遺産登録や東海北陸自動車道路の建設工

*地域経済研究所奨励研究員

図1 白川村人口の推移

単位：人



(出典) 総務省「国勢調査」より作成

事などを背景とした転入者の増加により、2000年には2千人を超え、人口増加率(13.6%)は県内第1位となった。しかし、それ以降は、1,900人前後ではほぼ定着しており、今後、各種建設工事が終了し、人口は大幅に減少することが予測されている。

白川村の沿革

白川村は、1875年の町村制施行時に、23村が統合して白川村を名乗り、1888年の市制町村制公布時に村役場の庁舎が建設されている。名前の由来としては、過去から庄川流域は白川郷と呼ばれており、「下白川郷」と呼ばれる川下側が白川村、「上白川郷」と呼ばれる川上側が莊川村(現在は高山市)を名乗ることとなった。

また、白川村は、平成大合併時には、当初高山市と大野郡、吉城郡の15市町村で設置した「飛騨地域合併推進協議会」に参加し、1市2郡の大合併構想を模索していたが、中心部と周辺部との地域間格差や新庁舎までの遠距離化によるサービス低下、伝統文化の稀薄化など経済・生活・文化面からの懸念があるとともに、村民の78.9%が単独を選択すべきとの声もあり、2002年10月に協議会から離脱宣言し、単独村を選択して、現在に至っており、飛騨地域では唯一の

町村となっている。

白川村の産業構造

白川村の産業構造について、国勢調査(2005年)による産業別就業者割合をみると、第1次産業は2.5%、第2次産業は34.2%、第3次産業は63.3%となっており、第1次産業の割合が極端に低く、第2次産業や第3次産業に特化した構造となっている。また、第3次産業の就業者割合の内訳をみると、卸売・小売業が30.3%、飲食店・宿泊業が52.5%と約8割を超えている。さらに、職業分類別就業者割合では、白川村のサービス職業従事者が4人に1人(24.2%)を占め、県内1位になるなど、白川村の産業構造が、観光関連産業に依存した就業形態になっていることがわかる。

第1次産業としては、農業は山間地にある耕地が狭い零細農業である一方、林業は95.7%を占める森林の過半数を国有林が占め、長期間、雪に閉ざされるため、産業として成立しておらず、第1次産業の生産条件は極めて厳しい状況にある。また、第2次産業としては、従来からの村の主力産業である建設業や河川の土砂を原料とする生コン・砕石業があり、村内経済の活性化に大きく寄与しているが、今後、高速道路

など大規模建設工事終了や公共事業の抑制により、大変厳しい状況になることが予測されている。さらに、第3次産業としては、地域の小売店等が村民の消費行動の多様化、広域化などに伴い厳しい状況に置かれている一方、観光関連産業が村の基幹産業として、村内経済を支えている。

これまでに白川村の産業構造を大きく変化させた要因としては、1951年に始まるダムや発電所建設と1995年の白川郷合掌造り集落の世界遺産登録である。ダムや発電所の建設は、10年以上に渡って進められ、この間の数千人規模の人口移動をもたらした。また、世界遺産への登録は、観光客数を急増させるとともに、観光関連施設の整備が急速に進められ、村の産業・経済構造を大きく変化させてきている。

1-2 白川村観光の現状と課題

次に、2007年9月7日～8日、10月8日～9日の2回にわたり実施した「岐阜ほんもの体験交流プログラム」現地調査において、白川村役場や白川郷観光協会、旅館組合等の地元観光関

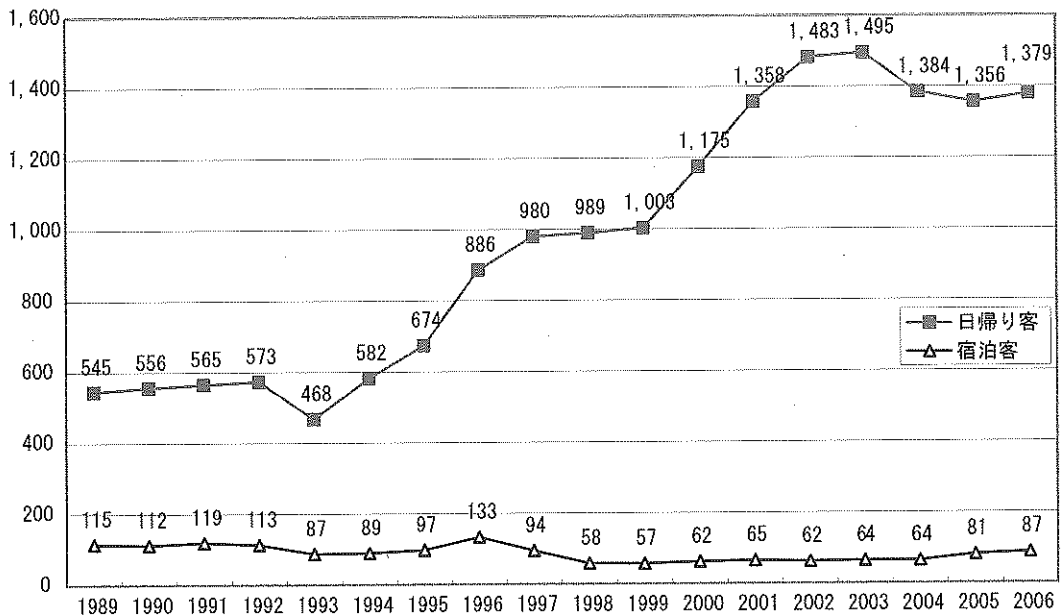
係者とのヒアリング結果等を踏まえながら、白川村の基幹産業として、村民の生活や経済を支えている観光の現状と課題を明らかにする。

白川村観光の現状としては、1995年に「荻町地区の合掌造り集落」が世界遺産に登録されて以降、観光客数は約60万人から約150万人へと急増している。しかし、その内訳(2006年)をみると、宿泊客は約9万人と全体の約6%に過ぎず、日帰り客が約138万人と大多数を占める通過型観光地となっている。

最近の観光客の動向をみると、世界遺産登録による知名度アップや東海北陸自動車道の延伸に伴う交通アクセス効果を背景として、増大してきた日帰り客は、旅行会社のバスツアー客の減少等により減少傾向にある。一方、長期にわたり減少傾向にあった宿泊客については、最近3年間では、愛・地球博(2005年)の開催や自然体験型研修施設であるトヨタ白川郷自然学校の開校(2005年)などに伴い増加傾向にある。また、宿泊客の内訳をみると、慰安旅行などの消費型団体宿泊客がほとんどなくなり、グループや家族、1人旅等の少人数宿泊客が増加して

図2 白川村年間観光客の推移

単位：千人



(出典) 白川村商工観光課「観光統計」より作成

いる。

一方、「2010年までに1,000万人の訪日外国人誘致」を実現を目指すビジット・ジャパン・キャンペーンの効果もあり、外国人観光客は約8万人と急増している。しかし、外国人宿泊客は約2千人に過ぎず、多くの外国人観光客は、中部国際空港や小松空港経由で入国し、高山や金沢、富山などを経由する広域観光ツアーの経由地として白川郷を訪問しており、滞在時間も少なく、経済効果はあまりない状況にある。

次に、白川村観光の課題としては、年間約150万人の観光客が訪れる一大観光地となっているが、高山、立山、金沢など中部地方における有名観光地の中間点にあり、観光ツアーの最終目的地ではなく、食事・休憩用の経由地となっている。このため、平均滞在時間は、約1時間未満と極めて短かく、典型的な通過型観光地となっており、魅力ある観光地づくりを推進し、滞在型観光へつなげていくことを最大の課題としている。

第2として、2008年7月に東海北陸自動車道（白川郷IC～飛騨清見IC間）が開通し、白川郷への交通アクセス向上に伴う日帰り客の増大効果が期待されている一方、国道156号の利用客の減少や、名古屋方面から石川・富山方面への移動時間の短縮に伴う宿泊客の大幅な減少につながることも危惧されており、その対応策への重要性が増大している。

第3として、宿泊客が入手する宿泊施設の情報収集手段としては、インターネットや口コミ情報などが活用されており、特に、外国人宿泊客の大多数は、インターネット経由で直接予約が入ってきており、ITを活用した観光誘客・宣伝が一層求められている。

これらの課題に対応していくため、地元観光関係者の意見としては、①各宿泊施設ごとに個性を発揮し、客をもてなす体制づくり、②宿泊施設が相互に連携し、全体をまとめていく取組、③白川村の独自の地域資源を真に体験交流できるプログラムを追求し、見る観光から感動・体験する観光へと転換していく必要があると考えている。



白川郷まるごと体験宿のPR看板

第2章 地域資源を活用した体験交流事業の現状と課題

第2章では、白川村へ2回の「岐阜ほんもの体験交流プログラム」現地調査を通じて、実態把握した白川村内の地域資源を活用した体験交流事業の現状と課題を紹介する。

2-1 白川郷まるごと体験宿

滞在時間が短い通過型観光客が急激に増加するなか、白川郷の自然や伝統、文化など様々な体験交流プログラムを提供し、地域住民との交流を深め、滞在型観光地へと転換していくため、2006年度より「白川郷まるごと体験宿」（以下、体験宿）を開始している。

体験宿は、白川郷観光協会が実施主体となり、宿泊施設が自ら体験交流プログラムを企画し、宿泊付旅行商品として提供する取組である。「まるごと」と名付けた理由としては、エコツーリズムとグリーンツーリズムの両面に対応し、村内のあらゆる地域資源を活用した体験交流プログラムの提供を目指しており、現在、5軒の旅

館や民宿(荻町合掌集落3軒(城山館、大田屋、一茶)、平瀬温泉2軒(山水、白山館))が参加している。

事業実績としては、2006年度は、味噌作りや川魚の掴み取り、蛍観察がメニューとして用意され、年間2回の開催実績であったが、2007年度は、利用者の体験選択の幅を広げるため、①農業体験(田植え・稲刈り・農作物収穫・山菜取りなど)、②雪体験(冬の星空・花火・雪遊びなど)、③料理体験(味噌作り・餅つき・田舎料理作りなど)、④そのまんま体験(魚釣り・わら細工・川遊び・合掌集落ウォーキングなど)の4分野のメニューを用意し、年間11回も開催されるなど、事業規模を拡大している。

体験宿の参加状況としては、2006年度はPR不足や事業実施回数が少なかったことも影響し、参加者があまり集まらなかった。しかし、2007年度より体験メニューを増やすとともに、パンフレット作成・配布やホームページによる積極的なPR活動を展開したこともあり、多くの参加者が集まるようになってきている(中止イベントは1回のみ)。また、参加費(宿泊+

体験料)は、平均15,000円とやや高めであるにも関わらず、参加者には大変好評な状況にある。

今後の課題として、事業拡大に向けた体制づくりが問題となる。現在、一部の宿泊施設が中心となり、体験交流プログラムを実施しているが、白川村では家族経営による小規模な民宿が大多数であり、より多くの宿泊施設自体が事業の企画・実施主体となることには限界がある。事業拡大をしていくためには、宿泊施設等の受入れ容量を確保しつつ、体験交流プログラムの実施体制(プログラム開発、人材・活動場所の



トヨタ白川郷自然学校の外観

表1 白川郷まるごと体験宿の事業内容(2007年度)

イベント日程	体験メニュー	開催場所	料 金
5月20日～21日	「(ブナ)(どぶろく)の米(トヨニシキ)田植え」と「餅つき」	平瀬温泉	大人15,000円 子供12,000円
5月26日～27日	荻町合掌集落内(田植え)	荻町合掌集落	大人13,500円 子供10,500円
6月17日～18日	あまご釣り大会・山菜取り		延期
6月23日～24日	山菜取り	荻町周辺	中止
8月2日～3日	夏休み向け体験(星空観察ツアー・イン・白山スーパー林道)	平瀬温泉	大人12,000円 子供9,000円
8月22日～24日	秘境大白川体験ツアーと熊汁作りと郷土の民話・民謡体験	平瀬温泉・荻町	大人30,000円 子供24,000円
9月18日～19日	あまご釣り大会	平瀬温泉・荻町	
9月25日～26日	稲刈り体験・熊肉料理	荻町合掌集落	
10月25日～26日	秘境大白川の紅葉と味噌作り体験	平瀬温泉	大人15,000円 子供12,000円
1月29日～31日	トヨタ白川郷自然学校体験と餅つきとわら細工	荻町地内	東京発49,000円 現地39,000円
2月22日～24日	トヨタ白川郷自然学校体験と冬の花火・田舎味噌作り	平瀬温泉	東京発52,000円 現地42,000円

(出典) 白川郷まるごと体験塾パンフレットより転用

確保など)を整備し、地域外からより誘客効果の高いPR活動を展開するなど、地域が一体となった事業推進体制を整備することが求められている。

2-2 トヨタ白川郷自然学校

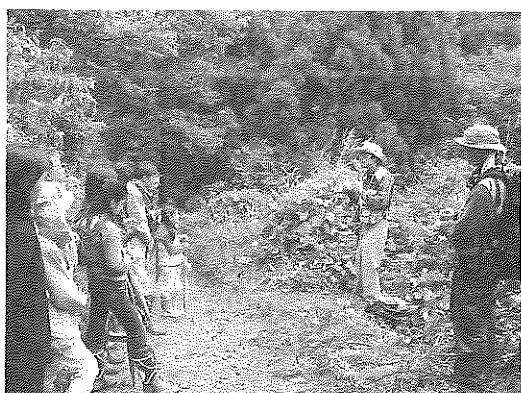
トヨタ白川郷自然学校は、(株)トヨタ自動車为社会貢献活動を目的として、2005年4月に開設され、自然体験を通じて自然環境教育を提供する研修施設であるとともに、約100人規模まで受入可能な宿泊施設である。

自然学校は、白川村とトヨタ自動車、日本環境教育フォーラムなどで構成される「NPO法

人白川郷自然共生フォーラム」により運営されており、約25人のスタッフ(うち、トヨタ自動車出向社員4名)で構成され、自然体験を指導・案内するインタプリター9名が常駐している。2006年度は親子連れを中心とする一般客や企業・学校研修を中心とする団体客など、総勢約1万3千人が宿泊している。

自然学校では、白山麓に広がる大自然、世界遺産、白川郷の伝統文化、最先端の環境技術の体験を普段の暮らしにつなげ、環境を大切にする心を育む体験交流プログラムを提供しており、具体的には、昆虫採集や森林トレッキング、火おこし、沢歩きなど、多様なプログラムを提供しており、①毎日催行するデイリープログラム、②季節に応じてメニューを用意するイベントプログラム、③人数や内容、催行期日などの利用者のニーズに応じたオーダープログラムからなる3種類の自然体験交流プログラムを提供している。また、冬期にも、雪中キャンプ、スキー体験、雪像づくりなど雪上体験メニューを用意するなど、1年を通じて白川郷を満喫できる体験交流プログラムを用意している。

トヨタ白川郷自然学校の基本理念として、白川村の持続可能な発展に貢献・寄与する役割が明確化されており、現在も地域活性化に関する



森林トレッキングの風景

表2 トヨタ白川郷自然学校の体験交流プログラム(2007年度)

種類	体験メニュー	詳細内容	料金
デイリープログラム			
	クラフト工房 (レザー、シルククラフト、ヒデ細工)	定員:30名 時間:2時間 対象:親子・小学生以上	500円~ 1,500円
	夜の森の語りべ小劇場 (夜の森林のメッセージリレー)	定員:30名 時間:1時間 対象:親子・小学生以上	1,000円
	モーニングガイドウォーク (朝の約1時間30分の森林散策)	定員:30名 時間:1.5時間 対象:約1kmの山道を歩ける方	1,500円
	二十四節気 季節のプログラム (旬の自然を満喫するプログラム)	定員:20名 時間2時間 対象:親子・小学生以上	2,000円
	※雪どけ沢歩き、春のお花めぐり、山菜採り、昆虫ハイク、魚のつかみ獲り、白川郷の自然を訪ねるエコツアー、水源地探検、探鳥ウォーキング、焚き火マスターなど		
イベントプログラム			
	※インタープリターと登る白山、親子の夏休みクラフトキャンプ 流星ウォッチング、インタープリター入門キャンプ、ベーシックツリークライマー講習会、鮭のいた川、物の来た道探訪 など		

(出典) トヨタ白川郷自然学校パンフレットより転用

協力事業として、グリーンマップ制作や合掌集落の専門ガイド制度の立ち上げを支援する一方、料理はフランス料理に限定し、体験交流プログラムも自然体験を中心としており、体験提供エリアも白山の麓に広がる自然学校の周辺地域に限定するなど、地元宿泊施設とも共存できるよう差別化を図っている。

また、専門学校の修学旅行や白川郷まるごと体験塾において、自然学校と白川郷の宿泊施設で1泊ずつ相互に連泊させたり、自然学校の伝統文化体験交流プログラムとして、「白川郷観光案内の会」のガイドによる白川郷・合掌集落案内を実施するなど、相互連携関係を構築しつつあり、2006年には、自然学校と地元宿泊施設の宿泊客数が両者とも増加するなど、相乗効果を発揮している。

今後の課題としては、白川郷の地域資源（自然や伝統、文化など）を活用した交流体験プロジェクトを一層拡大していくため、地元の関係機関等との共存関係による宿泊体験体制づくり（プログラムメニューの作成、宿泊分担など）など、交流体験プロジェクト全体を推進する中心的な役割を担うことが期待されている。

2-3 白川郷観光案内の会

白川郷観光案内の会は、世界遺産に登録された白川村荻町地区、大白川や天生湿原などを対象として、白川村に來訪した観光客を案内するボランティア団体である。

案内の会としては、現在13名が会員登録されているが、あくまでボランティア活動であり、家業を優先していること、合掌集落案内は地元を良く知る住民にしか案内できないことなどを理由として、実動できる人員は7名、常時対応可能な人員は2名となっている。受入れとしては、1日1回を原則とし、白川郷観光協会への申込による完全予約制としており、秋の繁忙期を中心として、年間120回程度活動している。

基本的には、ガイド1名に対して観光客20名を上限に観光案内しており、ガイド料金は2時間コースで2,000円となっているが、コースの設定や案内時間等は柔軟に対応することが可能



荻町合掌集落を案内するボランティア

である。また、観光案内する内容としては、白川村の歴史や文化、風習をはじめ、世界遺産として登録された経緯や、合掌集落を守り続ける地域住民の取組み、合掌造りの建築構造などについて、荻町合掌集落を巡回したり、和田家住宅など合掌造民家を見学しながら、わかりやすく説明している。

また、白川郷観光案内の会では、トヨタ白川郷自然学校とも連携し、同所の宿泊客向けに白川郷・合掌集落を案内したり、有料ガイド養成研修会への参加を支援してもらうなど、合掌集落ガイド制度の立上げを目指している。

今後の課題としては、実質的に観光案内できるガイド数が不足しており、白川郷観光協会とも連携し、人材育成・確保を目指していく必要がある。また、観光案内をボランティア活動ではなく、専門ガイドとして制度化するなど持続可能な仕組みへと制度を確立することも必要で



合掌造り集落と水田の風景

ある。また、ガイド内容についても、個人によりバラツキがあり、白川村の歴史や文化、風習などをきちんと伝えていくためにも、マニュアル化をしていくことが必要となっている。

2-4 白川郷荻町集落の自然環境を守る会

白川郷荻町集落の自然環境を守る会は、荻町地区の合掌家屋の保存と利活用を推進し、文化財を保護しながら、地域の自然環境の保全・再生、産業振興を推進する団体である。守る会では、合掌集落の景観を守り、自然環境を保持するため、休耕地を復元し、水田へ復旧する活動を実施している。これまでも、地元小学校や専門学校、村内民宿に宿泊する希望者を対象に田植えや稲刈り、ハサ掛け体験など農作業体験を無料で実施しているほか、茅刈り、餅つき体験など様々な体験交流プログラムを提供している。特に、小学生向けの農業体験は、教育効果や地域の活性化、環境保護に効果をもたらすと

ともに、観光客が多く訪れる地域であり、注目と反響を呼ぶなど波及効果は大きく、守る会としては、今後も積極的に受け入れていきたいと考えている。

しかし、受入人数としては、20名程度と少人数であることや、天候により影響を受けるなどの課題もあり、他団体の体験交流プログラムとの組み合わせるなど、その対応策が必要となっている。

2-5 (財)世界遺産白川郷合掌造り保存財団

(財)世界遺産白川郷合掌造り保存財団では、白川郷合掌集落の世界遺産地区内の景観保全と自然環境を維持するため、耕作放棄地の水田への復旧作業を実施しており、農作業体験希望者を日程の許す範囲内で受け入れている。

財団では、地区内の耕作放棄地のうち、6 haを管理し、水田耕作を行っており、その農作業について、役場などからの依頼を受けた場合



耕作放棄地から復旧した水田



野外博物館合掌造り民家園の外観

表3 野外博物館合掌造り民家園の体験交流プログラム

体験科目	対象者	定員	所要時間	費用
わら細工	中学生～大人	10名	半足1.5時間	500円
			両足2.5時間	700円
竹とんぼ	小学生～大人	120名	1時間	500円
ひで細工	小学生～大人	120名	1時間	500円
草木染め	小学生～大人	120名	1時間強	1時間強
餅つき	小学生～大人	相談応	1時間	1白6000円
園内ガイド	小学生～大人	10名以上	15分	無料

(出典) 野外博物館合掌造り民家園 HP より転用

には、年に数回、単発的に農作業体験を実施している。財団としては、あくまで耕作放棄地の水田への復旧を目指しており、耕作放棄地を借り受けた場合には、年間を通じて水田を維持管理する経費が必要となるため、一般向けに広く公募し、積極的に体験交流プログラムの場として提供することは、事業の性格上行っていない。

また、財団で借りている水田のうち、狭隘で手植えしかできない場所では、体験交流プログラムとして受入は可能であるが、時期を財団の作業日程に合わせる必要があること、天候により実施時期が左右されること、受入人数が制限されることなど様々な制約がある。

2-6 野外博物館合掌造り民家園

合掌造り民家園は、白川郷各地の離村民家を文化遺産として、1972年に展示・保存された野外博物館であり、県重要文化財9棟を含む25棟の合掌造りがあり、建物の中も自由に見学することができ、郷土の暮らしや自然と共生した先人の知恵を体験する施設である。

合掌造り民家園では、総合学習や修学旅行、体験学習の場として、小中高校生を積極的に受け入れており、課外教育の「場」として、草木染め、機織り、木工工作、流木工作、餅つき、ワラ細工などの体験活動に加え、田植え作業も実践している。さらに、夏休みには大学生、高校生を民家園のボランティアとして受入れ、体験学習を提供できる体制づくりに努めている。

第3章 子どもの学び場としての農山村体験交流事業の可能性

第3章では、子どもの体験交流型学習の機会として、白川村での体験交流事業の可能性及び課題について、学校教育と地域活性化の2つの側面の評価基準から評価する。

3-1 学校教育における可能性と課題

児童・生徒向け体験交流プログラム

文部科学省所管の地域間交流促進に関する研

究会(2004年3月)では、都市部から農山漁村や自然が豊かな地域に出かけて農林漁業や自然体験を行うなど、異なる環境における豊かな体験活動を「地域間交流体験活動」と定義し、その取組を促進している。第2章で紹介したとおり、白川村内では自然環境体験や農業体験に加え、日本古来の伝統・文化を再確認できる体験交流プログラムを提供しており、これらを組み合わせることにより、他の地域にはまねのできない貴重な地域間交流体験活動となる。また、最近では、児童・生徒が宿泊する修学・教育旅行では、ホテルや自然の家等を活用する機会が多く、例えば、民宿に宿泊し、田舎生活を体験しながら、しつけやあいさつも学ぶことができれば、宿泊体験自体も地域間交流体験活動として十分な価値を持つことになる。

学校間交流による体験

白川小中学校のヒアリング調査では、過去から学校間交流の実績はあるが、双方のメリットに全くつながっておらず、効果的な体験交流プログラムにはなっていない状況にある。原因として、訪問校としては、学校訪問は修学旅行の訪問先の一つであり、旅行期間中の1割程度しか時間的余裕がない状況にある。また、交流内容も、受入校としては、白川村の伝統文化(伝統的な田植え、七福神・獅子舞の踊り等)を紹介しているが、訪問校の反応もあまりよくない状況にある。訪問校は滞在時間が短く、学校間交流をあまり重視していない一方、受入校は事前準備等の大変な労力をかけて、交流事業をさせられている状況にあり、一方通行的な交流となっている。今後、学校間交流に十分な時間を確保するとともに、両校の児童・生徒と一緒に様々な体験・交流ができる内容を検討し、実施していくことが必要となる。

また、受入体制としては、学校交流に向けた事前準備や授業時間の制約もあり、小学校では年間2~3校程度、高学年約40人で1校当たり120人程度までなら対応が可能である一方、白川中学校では学業優先となるため、年間1校程度が限度としており、受入校にも負担がかから

ない仕組みづくりが求められる。

3-2 地域活性化における可能性と課題

宿泊施設の規模

白川村の宿泊施設は53軒と登録されているが、実際稼働している施設としては47軒、収容人数は1,200人程度となっている。しかし、内訳をみると、従業員制の旅館が15軒、家族経営の民宿が32軒となっており、消防法上の問題もあり、民宿では1軒当たり15~16人が限度である。また、教育・修学旅行として受け入れる場合、1学年200~300人の大規模校の対応は不可能であるが、1学年100人程度までなら対応可能である。宿泊先としては、教員等の引率者の負担にはなるが、小規模グループに別れて、分宿方式を取れば、民宿・旅館等でも受入可能であるが、1施設としてはトヨタ自然学校や大白川温泉静心庵(平瀬温泉)でしか受入できない。農山村体験交流事業の宿泊施設として、複数の民宿・旅館等の相互連携による少人数の分宿方式及びトヨタ自然学校や大白川温泉静心庵による宿泊方式でしか対応できない状況にあり、宿泊施設が相互に連携できる体制づくりが求められる。

児童・生徒の受入体制

児童・生徒を受け入れる場合、一般客とも混在し、従業員が対応する旅館よりは、相互にふれあい、交流時間が比較的確保できる家族経営の民宿が望ましいと考えられる。しかし、白川村では、過去に民宿が修学・教育旅行を受け入れていた時期もあったが、酒を飲み騒いだり、喫煙した吸殻を天井裏に投げるなど様々な問題が発生したため、数年前から民宿では、修学・教育旅行誘致を止めた経緯がある。また、料金としては、子ども価格で受入れるにも関わらず、子どもの面倒や対応には大変な手間がかかるため、家族経営による民宿側としては、あまり積極的ではない状況にある。今後、農山村体験交流事業として、児童・生徒を受入れる場合には、宿泊施設側に負担や手間がかかわらない仕組みづくりが求められるとともに、農山村体験交流

事業の受入メリットを地元関係者の理解を十分に深めながら、プロジェクトを推進していくことが重要となる。

体験交流プログラムの提供体制

従業員を抱える旅館では、施設内での顧客向けサービスを向上させ、宿泊客増加を目指す一方、家族経営の民宿では様々な行事(子どもの学校行事や親戚の集まる年末年始、どぶろく祭り)などの事情により、宿泊客を断る所も多数あり、宿泊業(ビジネス)よりも家族や日常生活を大切に作る風土がある。また、過去には、少ない宿泊客に対するおもてなし活動として、体験交流プログラムを提供する旅館・民宿が多数存在していたが、合掌づくり集落が世界遺産に登録されて以降、宿泊者数が急増し、顧客対応に負われる一方、体験交流プログラムも提供しておらず、ノウハウ等も失われた状況にある。さらに、民宿では、主人が会社勤めている兼業民宿が大多数を占めており、基本的に人手が少ない状況にある。

このため、「白川郷まるごと体験宿」が目指す宿泊施設自身が体験交流プログラムを復活し、提供する体制を再構築していくことは、大変難しい状況にあるため、宿泊施設以外の活動団体等が提供できる仕組みづくりを構築し、宿泊施設と体験交流プログラム提供団体等の相互連携体制を構築していくことが大きな課題となる。

交流体験期間

交流体験期間としては、2~3日程度の短期間であれば、白川村内で、宿泊施設と体験交流プログラム提供団体等の相互連携体制が推進できれば、対応は可能と思われる。しかし、長期間の宿泊体験としては、提供できる体験交流プログラムや提供主体、宿泊施設の確保など様々な側面から、現状では困難であると考えられる。このため、白川村内独自の体験・宿泊プログラム等の体制づくりを追求しながら、飛騨市や高山市、郡上市など近隣市町村とも連携を視野に入れた広域的な体制づくりも推進していくこと

が必要となる。

第4章 実施に向けた提言

第3章では、学校教育と地域活性化の2つの側面から、可能性及び課題について整理したが、第4章では、第2章及び第3章での体験交流事業と評価を踏まえて、今後の白川村での提言をまとめる。

宿泊施設間の相互連携による受入体制づくり

第3章で紹介したとおり、白川村の民宿・旅館等で受入れ可能人数は約100名、トヨタ白川郷自然学校は約100名であり、大規模校の農山村体験交流事業の受入は困難な状況にある一方、相互連携がなければ、交流体験期間も短期間でしか対応できない状況にある。

このため、第1弾としては、民宿・旅館等とトヨタ白川郷自然学校と相互に宿泊し、体験交流プログラムを提供できる一体型の旅行商品づくりを推進していくことが求められる。1泊は民宿・旅館等に、少人数に分かれて宿泊するとともに、1泊はトヨタ白川郷自然学校に宿泊することにより、約200名の大規模校まで受入可能となるとともに、少なくとも2泊3日は白川村内に滞在し、農山村体験交流事業を実施する。

また、民宿・旅館等では、田舎料理を食べて畳部屋に布団を敷いて寝る和式スタイルを体験できる一方、トヨタ白川郷自然学校ではフランス料理を食べてベッドで寝る洋式スタイルを体験でき、一度に全く異なる宿泊体験が可能となる。さらに、体験交流プログラムとしては、白川郷周辺地域では、伝統・文化体験や農業体験を実施する一方、トヨタ白川郷自然学校では、自然環境体験を実施するなど差別化を図ることにより、2泊3日間に他地域にはマネのできない貴重な農山村体験交流事業が実現可能となる。なお、1週間程度の長期滞在となる農山村体験交流事業については、隣接する飛騨市や高山市、郡上市との連携を探りながら、仕組みづくりを構築していくことが必要となる。

宿泊施設と体験交流プログラムを有機的に連携させる体制づくり

白川村では、第2章で紹介したとおり、宿泊施設やボランティア団体、財団法人など、多様な主体による地域資源を活用した体験交流プログラムが提供されている。

このため、新たに体験交流プログラムを企画・開発するより、既存の体験交流プログラムを発掘・把握しながら、宿泊施設とも有機的な連携を推進するために、白川郷観光協会やトヨタ白川郷自然学校、民宿・旅館、白川村役場等の地域が一体となり、滞在型観光地づくりを推進する組織を設置していくことが求められる。組織には、①情報交流、②人材育成、③市場開発などの機能を持たせる一方、民宿・旅館等とトヨタ白川郷自然学校を組み合わせた地域密着型旅行商品の企画開発、受入手配、プロモーション等を提供する組織へと発展することが期待される。

なお、2007年より地域資源を熟知した地元観光事業者による旅行商品を創出できる仕組みとして、第3種旅行事業者が募集型企画旅行を実施できる規制緩和がなされ、既に全国各地では、観光協会やホテル・旅館等が地域独自の魅力を活かした旅行商品を企画・提供する取組も始まっており、白川村においても組織を早急に設置し、こうした制度を活用しながら、滞在型観光地づくりを推進していくことが期待される。

農山村体験交流事業を支える人づくり

白川村では、第3章で紹介したとおり、宿泊施設では子どもの受入に対しては、料金が安い割には手間がかかるため、費用対効果の側面から積極的ではない。また、体験交流プログラムでは、宿泊施設自体が提供する仕組みを拡大するには、人材不足の側面から難しい状況にある。

このため、大学生やNPOなどの都市部住民やトヨタ白川郷自然学校のインタープリターなどを活用しながら、農山村体験交流事業を実施するサポート体制づくりを推進していくことが求められる。民宿・旅館等の宿泊施設においては、寝泊まりする児童・生徒の面倒を見る支援

活動を展開する一方、白川郷周辺地域において、提供可能な体験交流プログラムを提案し、インストラクター役を担う仕組みを構築する。また、トヨタ白川郷自然学校のインタープリターが、白川郷周辺地域における自然環境に関する体験交流プログラムを提供することにより、体験交流プログラムのメニューの多様化も実現できる。

なお、既に奈良県十津川村と奈良県立大学との間で「連携協力協定」が締結され、実際に同様の取組が始められている。大学側のメリットとしては、学生が農山村体験事業におけるインストラクター役として活躍することにより、地域に貢献でき、地域づくりを担う人材育成につながるため、単位認定する仕組みを検討している。白川村においても、例えば、岐阜経済大学地域連携推進センターと相互連携協定を締結し、農山村交流体験事業のサポート体制づくりにつなげていくことが期待される。

新たな学校間交流の仕組みづくり

白川小・中学校ともに、都市部と農村部との学校間交流は、大変有意義であると考えているが、現状では様々な問題があり、積極的な取組につながっていないため、次のような新たな学校間交流の仕組みを構築し、体験交流プログラムとして提供することを提案する。

第1として、白川小学校では、白川郷合掌集落を学ぶ特別な学校行事がない状況にある。このため、小学校では、白川郷観光案内の会とも連携しながら、やさしく合掌集落や村の歴史等を案内できるガイドブックを作成するとともに、児童はガイドブックを活用し、観光案内しながら、訪問校の児童と一緒に、村内を巡る学校間交流事業を実施する。この結果、児童は村を学ぶ良い機会を創出でき、郷土愛にもつながる一方、訪問校の児童もわかりやすい観光案内により、白川郷合掌集落に関心を持ち、相互理解や交流も深まるなど、様々な効果が期待できる。

また、第2として、白川中学校では、生徒は合掌集落の茅刈りや屋根葺替えの体験や歴史・

文化調査活動などを通じて、白川村の自然や文化、伝統を十分に理解している。このため、訪問校と一緒に村内を巡り、英語も使用しながら、観光案内する学校間交流を実施する。さらに、外国人観光客向けに英語で観光案内する体験学習まで発展することも可能となる。こうした取組を推進することにより、生きた英語を学びながら、郷土を一層理解し、相互に交流できる大変有意義な取組へとつなげることも期待できる。

おわりに

1995年に合掌造り集落が世界遺産に登録されて以降、年間150万人の観光客は、慎ましやかな生活を大きく変貌させ、交通渋滞やごみやし尿の問題、集落内の経済格差、「結」の存続への危機等様々な問題を投げかけてきた。また、2002年には単独村を選択し、経営資源に乏しい村では、行財政改革と行政の効率的な運営が最大の課題となっている。

こうした厳しい状況下において、次なる大きな課題として、2008年7月に東海北陸自動車道の全線開通が迫っており、白川村の観光は、通過型から宿泊・体験型（滞在型）への転換が求められている。今回の訪問調査を通じて、地元観光関係者には、この問題に対する危機感はあるが、現行の観光客への対応で手一杯であり、村全体ではなく、一部の関係者だけが滞在型観光への取組に着手している状況にある。しかし、白川村に隣接する高山市と郡上市では農山漁村で長期宿泊体験をすることを目指す「子ども農山漁村交流プロジェクト」のモデル地域に選定され、高山市と金沢市、松本市では相互に連携した誘客事業を展開するなど、市町村合併による広域化のメリット活かしながら、東海北陸自動車道の全線開通を見越した広域的な観光事業が展開されつつある。

今後、単独村を選択した白川村では、こうした地域とも競争しながら、村民の生活や経済を支えていくためには、新たな観光対策として、「結」の精神のもと、村民や事業者、各種団体、行政等が相互に連携し合い、他地域にはマネの

できない村独自の交流体験事業の仕組みを村全体で追求し、自立的発展につながる地域内経済循環の形成につなげていくことを期待したい。

最後に、今回の研究論文作成にあたって、2回にわたり「岐阜ほんもの体験交流プログラム」現地調査を実施した際に、ヒアリングや意見交換等にご協力いただいた白川村の宿泊施設やボランティア団体、財団法人、小中学校、役場などの関係者の皆様をはじめ、調査報告書をまとめていただいたコミュニティ診断士の平孝明氏、中島八重子氏、市来恭子氏の皆様にも多大なご協力を賜り、ここに深く感謝とお礼を申し上げます。

グラム体験

白川小学校、白川中学校、財団法人世界遺産白川郷合掌造り保存財団

《参考文献》

- ・谷口尚、鈴木誠（2006）『めざせ！日本一美しい村～世界遺産の村の自治と自立の設計図～岐阜県白川村』自治体研究社
- ・白川村（2001）『白川村第5次総合計画』
- ・（財）中部産業活性化センター（2006）『平成17年度飛騨白山地域振興計画策定調査報告書』
- ・（財）中部産業活性化センター（2007）『平成18年度飛騨白山地域振興計画策定調査報告書』
- ・岐阜経済大学まちなか共同研究室マイスター倶楽部（2007）『地域資源を活用した「子どもの学び場の創出」と観光資源化に関する調査研究』
- ・地域間交流促進に関する研究会（2004）『地域間交流を通じて子ども達の豊かな体験活動の充実を図るために―地域間交流の促進に関する調査― 中間とりまとめ』（文部科学省）

《調査協力者》

- 9月7日(金) 白川村商工観光課、白川村旅館組合、トヨタ白川郷自然学校
- 9月8日(土) 白川郷観光協会、白川郷荻町集落自然環境を守る会
- 10月8日(月) 平瀬温泉旅館、白川郷観光案内の会
- 10月9日(火) トヨタ白川郷自然学校体験プロ

